

地域の底力

熊野町

広島県安芸郡熊野町
あきくまのちよう

筆の里・熊野町を訪ねて



書筆だけでもたくさん材料、太さがある。目的に合わせて自分が使う筆を選ぶはよい。上は面相筆と呼ばれ、人形の顔や細字を書くときに使われる。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己

日本でも有数の筆の産地・熊野町。ここでも高齢化と後継者難が進んでいた。しかし、光明もある。後継希望者が生まれ、世界的な企業がインターネットで成長している。静かに日本文化を支える町を訪ねた。



「筆の里工房」は熊野町のシンボルの存在。観光客や書画作家などが訪れ、筆作りや筆の歴史などを見学できる。小中学生の社会見学の場としても人気を集める。

年間 一七〇〇万本を作る 「筆の都」があった

広島空港からも、JR広島駅から車で一時間とかならない距離に日本有数の筆の産地として知られる熊野町がある。町の高台は広島市のベッドタウンらしく、こぎれいな一戸建て住宅が並ぶが、町の中心部は昔ここができた当初からの古い道路に沿って、ときおりこの地方の伝統的な木造住宅や古い神社などが見える。今はトタンでぐるり

と囲まれているものの、本来は大きな茅葺き屋根を持っていたと思われる家も少なくなっている。

この落ち着いた静かな熊野町で、年間一七〇〇万本（〇一年調べ）もの書道用の筆が生産されているという。大変な数字だが、これでも八五年の三六〇〇万本に比べれば半減以下。それにつれて筆作りに従事する人の数は減る一方で、八五年の二〇〇〇人から〇一年の一三〇〇人へと減少した。生産額は同じく六五億円から五〇億円になっている。背景には筆需要の減少、安い中国製品との競合に

よる低価格化など、どの伝統的な産業にも見られる構造が存在している。

町でもそれに対して手をこまねいているわけではない。産業振興はもちろん重要だし、筆は書や絵画だけでなく、日本の伝統的分野、たとえば染色や漆塗り、人形作りなどさまざまな分野に欠かせない存在であり、廃れさせてよいというものではないからである。

そこで町では熊野町を全国的に「筆の都」として売り出し、筆に対する注目と需要を高めながら、次の時代を担う人材の育成に力を入れている。町役場の一角にある工房では、公募で集まった若者たちに対して、伝統工芸士の資格を持つベテランの筆職人が熱心に指導していた。

熊野町総務部企画課の藤森孝弘課長に、この研修事業がスタートした理由を教えてもらった。

『熊野筆マイスターズスクール』と名づけた筆職人後継者育成事業の研修は〇六年の八月にスタートしました。筆の穂首を作る『穂首コース』だけで八名の応募

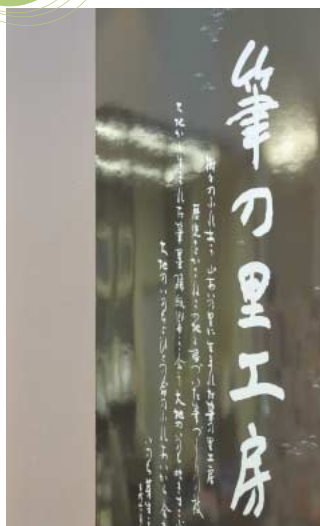
がありました。当初、指導してくださる伝統工芸士の人たちも、『こんな地味な仕事、今の若い者に耐えられるだろうか』と半信半疑でしたが、誰も脱落することなく頑張っています。

筆作りにはたくさんの道具を使う。鉄、焼きこて、彫刻刀……。人数分揃えるにも予算が必要なので、町では試しに町内に寄付を呼びかけてみた。すると、「若者を育てるためなら」と道具の寄付が相次いだ。どれも大切にしまわれていたもので、受講生たちがそれを受け継いで使っているというのも筆の町らしいエピソードである。

ご多分に漏れず、筆の世界でも職人の高齢化が進んでいる。だが、品質の高い筆を作るためには長い修業期間が必要で、最低一〇年は経験を積まなくてはならない。もちろん最近では穂首を中国から輸入してこちらでは組み立てるだけ、という筆もあるが、本来の「熊野筆」は職人が高い技術を使っ作られるものである。「熊野筆マイスターズスクール」は、将来にわたる「熊野筆」の発展を目標



「熊野筆マイスターズスクール」に集った面々。先生2人はいずれも伝統工芸士の資格を持つ筆作りのベテラン。自分の技術を若者に伝えたいと、指導にも熱が入る。ここでは穂首を作るコース、軸を作って筆に仕上げるコースと分かれている。一人前になるのに10年がかかるといわれる筆作りを3カ月間にわたって基礎から学べるとあって、受講生の熱意も高い。



「筆の里工房」の中に飾られている巨大な筆。馬の尻尾の毛が使われている。これだけの筆を作るためには、材料をそろえることも大変だが、根元をしっかりと縛る技術が重要。

としている。

「本当なら筆作りの現場の中で人材が育っていければ一番良いのでしようが、今現在はいくさんの若者を抱えて現場で育成できる会社がそれほど多くないのが現状です。そのため少しでも行政でバックアップしようと考えています」（藤森課長）

町の現状の厳しさも伝わってきたが、「熊野筆マイスタースクール」で熱心に研修を受ける若

者たちの表情に、明るい兆しを見たような気がした。町では今後、「筆の都」を軸とした観光客誘致にも力を入れるという。

ふるさとの産業を知り郷土愛を育てる

熊野町郊外にある「筆の里工房」は広く明るい建物である。

ここでは伝統工芸士の資格を持つ筆職人や友禅職人による実演のほか、館内にあるパソコンでも筆作りの実際に学ぶことができる。地下の展示コーナーではさまざまな熊野の筆が並び、筆の種類の多彩さに驚かされた。

聖徳太子の時代に使われていた筆の作り方と、現在の作り方が構造上まったく違うこともわかる。秋の遠足シーズンということもあって、たくさんの小学生たちが見学に訪れ、屋外の公園でお弁当を広げる姿もあった。地元の産業について学び、郷土への愛着と誇りを育てる良いきっかけになると思われた。目の前に広がる池は、ちょうど硯の海（水をさすへこみの部分）を

イメージしているとかで、「筆の里工房」全体が筆の形になっているというこだわりである。

広い展示会場では人気俳優で最近では画家としても活躍する片岡鶴太郎さんの個展が開かれ、人気を集めていた。

館内を案内してくれた財団法人筆の里振興事業団の石井節夫事務局長が思いがけないことを教えてくれた。

「館内に販売コーナーがあつて、書筆や絵筆が置いてありますが、今人気なのは化粧筆なんです。化粧筆は単価が高いものも多いのですが、女性の来館者に大人気ですね」

コーナーの中央部に置かれた化粧筆はたくさんの種類があり、メイクアップに興味を持つ女性たちであれば、皆目を輝かせそうな品揃えである。販売コーナーの売り上げで、そろそろ書筆の金額と肩を並べる勢いだという。

そういえば、熊野町の化粧筆は最近メディアでも取り上げられることが増えてきた。伝統的な書筆の技術を生かすと、なぜ良い化粧筆が作れるのだろうか。



書筆の高度な技術が生んだ世界的な化粧筆

その秘密を探るため、世界的なメイクアップアーティストも数多く愛用しているという化粧筆のトップランナー・白鳳堂を訪ねてみた。白鳳堂は売上高一〇億円を超える熊野町でも有数の筆メーカーである。数々の有名ブランドに化粧筆をOEM



白鳳堂で作られている化粧筆の数々。用途に合わせた1,000種類もの筆が生産されている。世界的なメイクアップアーティストの指名買いもよくあることだとか。左は社長の高本和男氏と次男でマネジメント統括部長を務める高本光氏。長男の壮氏は営業全般を担当する。



（相手先ブランドによる生産）供給しているほか、世界的にも有名な某アニメ制作会社にも特注の筆を納めているというから、技術の高さがわかるというものだ。

家内制手工業の形をとっているところが多いと聞いていたが、白鳳堂内部を案内してもらうと、手作業と道具の絶妙な融合が実現していると感じられた。そうでなければ、一〇億円以上もの売り上げを多種多様な筆だけで上げられるとは思えない。

本社二階にある販売コーナーが圧巻であった。口紅、頬紅、眉、アイライン、ファンデーション用とたくさんの種類に分かれている筆がさらに細分化され、使われる毛の種類や穂首の大きさ、軸の長さなど何種類にも分かれているのである。プロのメイクアップアーティストは道具へのこだわりが非常に強い。彼らの厳しい要求に对应しているうちに、これだけの種類を揃えることになったという。

材料の毛の 三〇〜五〇%を捨てて 品質を維持する

社内を案内してくれたマネジメント部の高本光統括部長は高本和男社長の次男である。銀行で一〇年間経験を積み、その後

熊野町に戻ってきた。筆作りのさまざまな工程を見せてもらうと、そのほとんどが「さらえ取り」という無駄な毛を取り除くことに費やされていることに気づいた。筆で字や絵を書いていくとき、よけいな毛が一本でも出てくると作品はダメになってしまう。人形の目を描くとき、友禅で細かな模様をつけるときによけいな毛が出たらどうなるだろう？ それだけで台無しである。化粧筆も同じである。

「紅筆がぱっくり割れたりすることがありますが、あれはよけいな毛があったからです。非常に不快なものです。肌へのあたりも悪くなってしまう。ですから当社では、繰り返し繰り返しさらえを取っていくわけです。最初に用意した毛は三〇〜五〇%取り除かれてしまふんです。伝統的な筆作りの技術は非常に高度なもので、これがしっかりしていれば、化粧筆でもなんでも良いものが作れます。一見同じように作られていながら、品質の差は大きいものですよ」

ちなみに某アニメ制作会社の

注文は非常に厳しいという。「でもそれに応えているうちに当社の技術が磨かれるのですから、ありがたいと思っています。メイクアップアーティストからのお仕事も同じですね」

何万本という筆を作るには道具化も欠かせない。頬紅などをつける大きめの筆は白鳳堂の主力商品のひとつだが、長さの違うヤギの毛とポリエステルの毛（先が細く加工されている）をまぜて揃えていく工程は何台もの道具を使って行われている。短い毛と長い毛をまぜて毛先を切らず丸い穂首を作っていくのは日本の伝統的な書筆の技術の応用で、これが使いやすさの秘密でもある。

「特殊な機械（道具）はこちらの注文に応じて大阪や広島メーカーに特注します。これほど道具化している会社はうちだけでしょ。結局ほかにはないから作るしかないんですよ」

工夫を怠らない白鳳堂だが、限界もある。筆作りに欠かせないさまざまな道具をこしらえる職人が減っているのだ。たとえ

未だに納品前の検品を自分で行う高本社長。社長室に持ち込まれるものには滅多に不良品は出ないが、それでも最終的にチェックする。長期出張の後など、どっさり筆がたまることも。新しい毛のチェックも行う。毛束で唇周辺の敏感な皮膚や粘膜をなぞってみて、使えるかどうかの判断を下す。



インターネットで 世界から 注文が殺到

社長室では白鳳堂の創業者・高本和男社長が待っていてくれ

ば最後のところで細かな無駄毛を抜き取る毛抜き。いい毛抜きを作ってくれる職人が高齢化で次々に仕事をやめてしまった。厳しい修業で技術を身につけても収入にならない道具作りは、筆作り以上に若い後継者問題に直面している。

中型の筆を作る工程。長さの違いのある毛を揃え、さらえ取りののちにふのりで固める。それを平目にまとめ、1本ぶんの太さの毛束にわけていく。形を整えると、中型の筆の穂首ができる。修練によって、目ではなく手の感覚で、短時間のうちに作業が行えるようになっていく。その速さに見学者もびっくり。

灰を使って脂を抜いた毛を揃え、何工程にもわたってよけいな毛を取っていく。これが「さらえ取り」。質の高い筆を作るためには欠かせない作業だ。毛を揃え、梳いてはさらえを取り、また形を整える繰り返し。長さの違う毛を使い、混ぜて形を整えることで書きやすい高品質の書筆が作られていく。



を制作したいと妻の美佐子さん（現事務）と共に独立した。「その頃は学校での書筆の需要も多くて、作れば売れた時代でした。でも私はこのままでいいのかと疑問を持っていました。よく売れてすごく忙しいものですが、本来なら一〇工程くらい必要だったのを五工程に減らしてしまふ。それはちょっと具合が悪いんじゃないかと思いはじめたのですが、たまたま家内が筆屋の娘でしたので、それなら二人でやろうということになっ

た。父が社長を務め、長男の壮氏が専務として営業を見る。次男の光氏は工場や総務全般を担当している。後継者難を抱える業界の中で、息子二人が後を継いでくれた珍しい例だ。筆作りの家に生まれた高本社長は六四年に本家の筆製造会社に入った

「子供の頃から自分たちで食事の支度をするのは当たり前でした。納品が間に合わないからと、中学生の頃ひとりで静岡に行かされたこともあります」（光氏）だが高本社長は、あるきっかけをつかむ。大阪へ向かう新幹線の中で見ていたコミック雑誌の中に、ニューヨークで活躍する日本人女性のメイクアップアーティストの記事が載っていたのである。「彼女にうちの化粧筆を見てもいいんじゃないか、ニューヨーク



たかもと・かずお

東京農業大学卒業。高品質の筆作りをめざして夫人とともに白鳳堂を設立。白鳳堂の筆は日本文化デザイン大賞、グッドデザイン賞などを受賞。また白鳳堂は「IT経営百選」、2006年経済産業省「元気なモノ作り中小企業300社」に選定された。高本社長も内閣総理大臣表彰「ものづくり日本大賞」伝統技術の応用部門にて「内閣総理大臣賞」を受賞している。

に留学していた甥に探させて、妻と二人、化粧筆を何百本も抱えて渡米しました。どれも私たちが手作業で作った筆でした。質の高さに驚いた彼女からカナダの有名化粧品会社を教えてもらったんです。

今度はその化粧品会社をトロント在住の同級生に探してもらい、また出かけました。そうしたら『本当にこんないい筆ができるのか』と興味を持ってくれ、帰国後五、六万本も注文が来ました。それからですね、あちこちのメーカーやメイクアップアーティストとおつきあいするようになったのは」

カナダの化粧品会社の注文があったときは、納品までほとんど寝る間もなく筆を作ったという。高本社長は「ブラシ」と言わず「筆」と言う。書筆の技術があつたからこそここまで良い化粧用具ができたという思いがあるからである。ここ四、五年はようやく資金繰りの苦しみからも解放された。今ではOEM供給だけでなく、東京・青山やロサンゼルスのレストランにも「白鳳堂ブランド」の直営店を持つ。こちらは壮氏が担当しているが、熊野町から世界に発信する企業が誕生したわけである。

次男の光氏は、

「やはりインターネットの普及は大きかったですね。世界中から当社のホームページにアクセスして注文してくださる。今は地方で仕事をしても、良い製品を作る努力を続ければ勝負ができる時代です。中国からもたくさん引き合いがあります。正直なところそれに比べ始めたら現場が追いつかないので、今のところ控えています」

と言う。白鳳堂で買った化粧筆を帰京後使ってみた。光氏推薦のリキッドファンデーション用の筆は、目の際でもきれいに塗れる。敏感な場所なのに、当たりが優しく刺激がない。

日本の伝統を 維持するために 筆作りを守りたい

三人の子育てをしながら夫を常に支え続けた美佐子夫人が、穏やかだが力を込めて言う。

「筆作りの技術が衰退してしまつたら、日本の伝統的なもの作りはすべて衰退するかもしれないのです。それを思つたら、どんなに苦しくてもやめようとは

思いませんでした」

アイライナー用筆としても重宝な面相筆は一ミリもないような穂首を持つ細い筆である。この筆を作るには非常に高度な技術が必要である。この筆がなければ、人形の目も、生え際の繊細な髪の毛も描けない。日本画家も大いに困るだろう。少しでも良い筆を作りたいと願い、夫と独立した人の矜持^{きやうじ}が言葉にこもっていた。

今は百円ショップでも筆が買える時代である。高い筆イコール良い筆ではないが、きちんとした技術を守つてもらうために、消費者も考えるべきことがあるだろう。目的にふさわしい筆を適正価格で買い、手入れをして長く使う。そうすれば、関係者も暮らしていけるし、後継者が育つ。最近「和」が再び静かなブームとなっているが、美しく繊細な「和の文化」を支えているのはもの作りに携わる人々である。

知らず知らずのうちに受けている恩恵に思いをめぐらせながら、熊野町を後にした。